



歴史的災害＝東日本大震災

----- いま、私たちが考えるべきことは？ -----

川口 裕志

未曾有の大災害となった東日本大震災を目の当たりにした今、震災関連ニュースの渦の中において、「何が真実か」を私たちは見抜かねばならない。そして何をなすべきか、を。

地震、津波直撃の東北、関東の悲惨な実態はもとより、直接被害の少なかった東京の私たちにも不安が押し寄せているこの事態。派生的な原発事故による放射能汚染、ヨウ素汚染から生活物資の供給停止など、二次、三次被害を被り、ガソリン不足、計画停電、交通遅滞、あるいは物資不足などなど不測の事態が次々と発生、私たちの文化・芸術活動の一時停止や休止ともなった一連の現象。

「想定外」という言葉がさかんに飛び交ったが、歴史の教訓から事態を想定していればこのような混乱は起きなかったのではないか。こうした被害の連鎖を、いま、私たち一人ひとりの、そして国全体の問題としてとらえることがとりわけ大切なことと思う。グローバルな視点でエネルギー政策をはじめ社会の在り方、人間としての生き方にいたるまで、みんなで考え合う時期にきているのではないだろうか。

罹災数日後、車を走らせていた多摩方面の夕刻。街灯は確かに明るく灯っていたのに、街道を反れて次の街道にぶつかる手前、信号が消えていて点滅すら

ない。左右確認、恐るおそる渡り進むにつれ、街灯、信号、民家やビルの明かりがなく、あたりは「死の海」の光景…、これが計画停電と初めて知る。

震災に関するメールが各地から届いた。高校の後輩からは、仙台の知人からの生々しい現地報告と、その後の彼の救援活動が。有機農を営む教室 OB（長野



インドの子ども達が追悼と支援のキャンドルサービス

県）からは「福島原発の爆発は核物質的にはチェルノブイリ級」と。教室生からは「毎日テレビを見て泣いています」。被災当日、都内にいて「JR は終日運行なく職場で一夜を」「文京区から 6 時間かけて歩いた」とか、「お茶の水駅で地震に遭い交通手段奪われて徘徊、ようやくタクシーに」と帰宅までの約 9 時間のドラマを文章に。その日のうちにオックスフォード（英）

から、翌日スペインから見舞が届いたとも。

相次ぐコンサート、イベント中止。アコーディオン参加の我が地元イベント、S.フツングをはじめ紹介していた幾つかのコンサートも中止。多くの音楽家たちが職を失う一大事が推定される。

節電で多摩地区の公共施設が軒並み休館、計画停電も伴って教室やサークル活動に不安を与えている。大手カルチャーセンターも今春の応募が大幅減と危機感を。世の中の不安を諸に反映する文化、宿命的だ。



皮膚面積の 2/5 で火傷は生命の危機を呼び起こすという。が、日本列島の震災図を眺めると背中に大やけどを負った人の姿に見える。日本中を震撼させ、恐怖の目で世界中がみている福島原発。最先端にある原発（化学）を、海水で冷やすというのはあまりにも原始的で滑稽、子どもの泥遊び。いまは冷すしかない、としてもだ。

ワニを騙して「皮を剥がれて丸裸」にされた ^{うさぎ} 兎が、「海水と太陽と風を浴びなさい」といわれ ^{ほうほう} 這々の体で ^{てい} 材クニシノミ科に助けられる、という昔話「^{いなば} 因幡の ^{しろうさぎ} 白兎」。安全神話を振りまいて津波に襲われ原発大惨事を招いた族と、何か似

ていないかな?!

50Hz、60Hz という東、西日本のサイクル（ドイツとアメリカのモーター方式の違い）、これがために西日本からの電力補給ができないと。こんなこと、国有化で早く統一しておけば計画停電などという事態は避けられたかも。電力各社の儲けの独占、縄張りにすぎないと。「東電国有化は避けられない」と英紙(フィナンシャルタイムズ)が書いた。

もう一つ気になる「想定外」。政府、東電、マスメディア、学者が繰り返す。「予測できなかったのだからやむを得ない」という免罪符、責任を曖昧にする言葉。国民はその呪文に引っ掛かる。「想定外は津波だけ」と言いきった学者もいた、がしかし貞観地震（西暦 864～869）、元号で貞観と呼ばれた時代に富士山、阿蘇山の噴火、そして三陸沿岸の津波と相次ぐ天変地異、マグニチュード 8.4 レベル。「東電の想定とは比較にならないでかい津波がくる」という研究者の警告を当時の審議会と東電が無視。津波ですら想定されていた、のだと。

この「想定外」、そもそも最悪の事態を考えて安全性を確保し国民の生命を危機から守るのが政治の役割ではなかったか。福島県農協中央会の緊急会議、「原発は人災だ」と組合長らの悲痛な叫びが相次いだ、という。



身内や地域を引き裂かれた悲しみの涙、熱い支援に感謝の涙、見守る感動の涙。日本中がこんなに涙したことは戦後なかったかも知れない。

3万人に迫る生死をさまよう犠牲者。20万人を超す避難民。いまだ続く国民の原発不安。こうした未曾有の大災害に、私たちは何ができるのか。

「アコーディオンは電気がいないからね」と我が生徒がいった。そうだ、どこでも演奏できるではないか。すでに地元をはじめ、被災者支援演奏やコンサートが各地で始まっている。「コンサートをやるも勇気、やめるも勇気」と、在日朝鮮人アコーディオニストが支援コンサートを。フィナーレは涙、涙。

日々、心身不安にさらされ、総じて日本経済の危機を呼ぶこの大災害。被災地も、そして私たちも、「困難に立ち向って強く生きる力」「共に支え合う力」を学びつつ……。